

●クルマ社会になって久しい今、公共民間を問わずバス路線は、全国でひとつまたひとつと消滅しているという。たとえ、乗客は少なくても、確実に必要としている人々は存在しているし、さらに高齢化社会の現実が存在しているはずなのだが……。そんなバス路線を追い続け、停留所の風景を撮り続けている柴田秀一郎さんの連載が始まりました。柴田さんはサラリーマンのかたわら、特にバス路線が消え続ける地方を中心にじっくりと撮影を続けています。バスを利用する人々の姿も含

め、バス停のある光景が今の日本の姿とどこかつながってくる力作です。今後の展開を期待下さい。

●長友健二さんの久しぶりのスードの特写、いかがでしたでしょうか。長友さんのお歳はなぜか定かではないのですが、たぶん孫のような年齢のモデルさんを独特の軽妙な会話でリラックスさせ、明るい雰囲気の中で撮るスタイルは健在。ふと考えてみれば、長友さんはずっと以前から一貫して「アカレイ」、癒されるスード作品を撮っていたわけですね。(M)

笹岡啓子 ■ Kanko-4

今年2月、1週間ほど沖繩に滞在。不慣れな土地ではいつもカーナビに助けられていたのだけれど、半島の先端や山深い道では通用しない。喜屋武岬を目指して出発したのに「モクテキチ、シュウヘンデス」と告げられた場所は、さとうきび畑の真ん中。レンタカー仕込みのよたよた運転で出くわしたのは同じく「わ」ナンバーの路駐グループ。

つられて路駐。さわさわと海への草むらを抜けると、そこは海に突き出た具志川城跡。整備の行き届いていないその一帯は、幾重もの時が、止まったまま折り重なる。深い深呼吸をするような、とても安らぐ場所。

撮影データ・ハッセルブラッド503CXI・プラナー80ミリア28・フジカラーNewプロ400



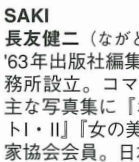
幸せ大国ブータン／菅 洋志 (すが・ひろし)  
1945年福岡県生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒。第8回、第15回講談社出版文化賞写真賞、第6回土門拳賞、第14回東川賞国内作家賞受賞。主な写真集、著書に『博多祇園山笠』『バリ・超夢境界』『ミャンマー黄金』『バリ島大百科』『マダムアジアのやさしい料理』『名シェフ直伝! にんにく料理』。



そのぬくもりに用がある  
写真・平岡 至 (ひらま・いたる)  
1963年宮城県生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒。カメラマンイジマカオル氏のアシスタントを経て90年独立。以後、広告やCDジャケットなどを中心に幅広く活動。主な写真集に『Ambient Hawaii』『アイ・ラブ・ミーちゃん』。http://www.itarujet.com/



無名のアースワーク〜地中海編  
有野永霧 (ありの・えいむ)  
1941年兵庫県生まれ。大阪芸芸(現・教育)大学卒。タイムライフ写真年間新人賞、第19回伊奈信男賞受賞。主な個展に「無名のアースワーク」[虚実空間・日本人景]。主な写真集に「虚実空間・都市」「虚実空蟬の風景」。



SAKI  
長友健二 (ながとも・けんじ)  
'63年出版社編集者を経てフリーランスカメラマンとなり、長友事務所設立。コマーシャルフィルム、雑誌など幅広い分野で活躍。主な写真集に「ポートレート撮影攻略法100」「ロシアンルーレット・II」「女の美学・脱がせの写真術」「アグネスラム」。日本写真家協会会員。日本広告写真家協会会長。日本写真協会理事。



多摩川川和  
内藤さゆり (ないとう・さゆり)  
1978年広島県生まれ。専門学校にてコンピュータグラフィックスを勉強中に写真と出会う。カメラマン事務所で3年間アシスタントを勤め、01年フリー。http://sayuri7110.petit.cc/



東京／中村 治 (なかむら・おさむ)  
1971年生まれ。成蹊大学文学部卒。ロイター通信社北京支局現地通信員(カメラマン)、雑誌カメラマン、鳥居正夫氏アシスタントを経て、4年間坂田栄一郎氏に師事。今年4月〜7月、中国北京にて個展「東京」開催予定。



東京巡警  
三好耕三 (みよし・こうぞう)  
1947年千葉県生まれ。日大芸術学部写真学科卒。日本写真協会新人賞、コニカプラザ奨励賞受賞。文化庁芸術家在外研修員としてアリゾナ大学で1年間研修。主な個展に「Picture Show 傍観」「Innocents 天真爛漫」「See Saw」「Exposure」。写真集に「In the Road」「Far East and Southwest: The Photography of Kozo Miyoshi」「グレイン」。



連載 ■ Kanko[4]  
笹岡啓子 (ささおか・けいこ)  
1978年広島県生まれ。東京造形大学卒。'01年より自らが参加するphotographers' gallery(東京)を中心として作品を発表。小冊子「HORIZONS」を刊行(自主制作)。写真展多数。



連載 ■ ライカで散歩[16] 冬の道  
北井一夫 (きたい・かずお)  
1944年中国鞍山生まれ。日本大学芸術学部写真学科中退。日本写真協会新人賞、第1回木村伊兵衛賞受賞。写真展多数。主な写真集に「1970年代NIPPON」「1990年代 北京」。



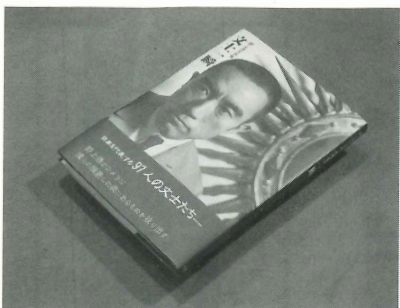
新・連載 ■ 標(しるべ)〜バス停にて[1] とんび岩  
柴田秀一郎 (しばた・しゅういちろう)  
1963年東京都生まれ。日本大学法学部・政治経済学部卒。「現代写真研究所」第23期全課程修了後、竹内敏信ゼミ在学中。第11回田村土門拳文化賞・奨励賞受賞。

# うなぎの寝床

木村恵一 ◎写真日記 16



文芸写真家木村恵一・けいいち  
1935年東京生まれ。日大芸術学部写真学科卒。日本写真家協会常務理事、日大芸術学部講師、NHK学園講師など



野上透写真集『文士一瞬』  
柏艸社・刊(札幌市中央区北一条西三ノ二 井門札幌ビル5階 TEL: 011-219-1211) / 3500円(税抜き)

## 友人、野上透君の写真集が出来上がった

二月某日

友人の写真家、「野上透君を偲び出版を祝う会」を開いた。野上君は私の学生時代からの友人で40数年間親しくつきあってきた友だが4年程前に他界してしまった。報道畑で優れた仕事を多く残してきた男だが、中でも出色の仕事は文士(作家)の写真撮影を続けていたことであつた。写真展「文士悠々」なども開き昭和文壇の顔の撮影をライフワークとしていた。没後、彼のお弟子さんや友人達が写真集として上梓したいと出版元を探していたが、札幌の出版社「柏艸社」が引き受けてくれ「文士一瞬」と題する写真集ができた。文士を写真集にしたものでは林忠彦さんの「文士の時代」や田沼武能さんの「文士」などが有名だが、野上君のこの本もなかなかの出来である。97名の作家が登場するがすでに半数を越す方々が鬼籍に入ってしまった。昭和文壇史を語るうえでも貴重なものになつてしまった。本人のいない出版記念パーティーというのはいちよと淋しいものだが、それでも生前彼と親交のあつた方々が150人も参会しての賑やかな会になり、彼の交遊の広さがうかがえた。機会がありましたらぜひ目を通して頂ければ

幸いです。

二月某日

冬季オリンピックがやっと終わった。毎早朝のように無理矢理起きてメモをとりながらテレビ観戦し寝不足の毎日だったが、無事終わってほつとしていた。実は某紙に写真家から見たオリンピックTV観戦記のコラムを何回か書くことになつていたので、開会式からしっかりと観ておかなければならなかつた。VTRで翌日観ればよいのかも知れないが、スポーツは結果がわかっているものを観ても感動は湧かない。好きなお酒もひかえ目にし、祝の会も二次会は断り早起きにそなえた。

開会式はご覧の通りお祭好きのイタリアらしく「情熱のスパーク」をテーマに華やかなショーだった。炎のスケーターや、やたらに上がる花火は充分テレビ観戦を楽しませてくれたが、驚いたのは後半に突然引退を声明した世界的テナー歌手パバロッチイが登場したことだった。もう聞くこともできないと思つていた歌劇トゥランドットの「誰も寝てはならぬ」を朗々と歌いあげた時には背筋が少々ゾクツとした。……星よ沈め/夜明けに私は勝つ/私は勝つ……

もつと驚いたのはフィギュアスケートで日本唯一の金メダルに輝いた荒川静香がこの曲で舞つた時だった。開会式のパバロッチイの力強い歌唱とダブッ

二月某日

オリンピックの新聞写真は今回各紙の写真を丹念に見た。大手各社はプレスカードを発給されたカメラマン3人の他に何人ものカメラマンが同行しているようだが、デジタル一眼レフの急速な発展でスポーツ写真はオリンピック開催のたびに良くなつてきた。特に今回室内競技の写真が素晴らしい、かつてはフィルムで苦労した室内競技、特にスケートの写真がよかつた。スピードスケート、フィギュア共にデジタル一眼レフの機能、性能をフルに駆使して躍動感のある瞬間を捉えた数々の名場面のカラーページが印象に残っている。これらの生の写真を早く写真展などで見てみたいものだ。

ともあれ寝不足・節酒の17日間もやっと終わった。今夜からゆっくりお酒が飲めるのが楽しみです。オリンピック、皆さんもおつかれさまでした。

※口絵ページ中にあるコメントは特に注のないものは作者によるものです。